# 今月の特集

差別のない同和行政をめざして ―「同和教育シリーズ」特集―

## オールロマンス事件

**「同和教育シリーズ」でのべてきたように、戦後、部落差別を解消するための様ざまな取組みが行われてきました。**

**しかし、一九五一(昭和二十六)年、京都市で起こった「オールロマンス事件」は、それまでの部落解放運動と同和行政の在り方をかえた画期的な事件でした。**

## 差別小説発行される!

雑誌「オールロマンス」一九五一(昭和二十六)年十月号に、「暴露小説特殊部落」という短編が掲載されました。

この短編は、京都市内に実在する被差別部落を舞台とし、ドブロク密造をいとなむ青年愚連隊とそれをかぎつけた刑事や警官隊との衝突を背景に、青年医師と被差別部落の女性との恋愛を主題にした、ありふれた恋愛小説といえるでしょう。

しかし、見過ごすことのできないことが、いくつかありました。

まず、題名に「特殊部落」という差別語を使い、しかも「暴露小説」と銘うって好奇的に書いていることです。

次に、被差別部落のようすを、極めて劣悪なものとして書いていることです。

「わんさと群集する蠅が飛び立つ前に、まず異臭鼻をつく奇怪な堆積が……」

「昨日の屠物は始末もつかず、片隅に蠅の跳梁に任せ切っていて、異臭が鼻を付いた」

などの表現が次々に出てきます。

さらに、被差別部落に対する差別意識が、いたるところで顔を出していることです。

―……企業を経営しながら部落の賤民をうるおし……」

「『(結婚相手は)何でもええで、部落者だけは止めとこうと思いますねん』…『なるほどな。部落者よりパン助の方がましかいな』」

このような部分が、いくらでもあります。

## オールロマンス闘争始まる

この小説のことを知った部落解放京都府委員会は、

「ありふれた、エロ・グロ・活劇ものでありカストリ小説である。しかし、作者の悪らつな差別意識は安っぽい博愛主義でカムフラージュして、部落をヤミと犯罪と暴力の巣窟にしあげて売り物にしている」ことを問題にし、行動を開始しました。

十月十九日、委員長朝田善之助たちは東京のオールロマンス社を訪ね、小説の差別性をただし、作者について調査しました。

作者は、本名を杉山清次といい、京都市の九条保健所に勤務する臨時職員でした。

さっそく本人に執筆の動機をたずねると、

『まことに申し訳ないの一語につきる。これは一年前に書いたもので、地名・人名など聞きかじりのまま、小説として何気なく書いた。』

という答えが返ってきました。

また、九条保健所にも抗議しました。作者が、衛生指導のために訪れる被差別部落での見聞を、好奇的に取り上げたことを問題にしたためです。

それから数日後、杉山は辞職届を出すように強制され、九条保健所をやめさせられました。しかし、これで問題は解決したでしょうか。



## 「これは、個人的問題」?

十一月末、部落解放京都府委員会は、「差別は個人的な問題ではなく、社会的政治的な問題として生起しており、当然政治的解決の方法をとる」という方針のもとに、高山京都市長と話し合いを持ちました。その席で高山市長は、

「職員の中にこういう差別行為をする人間がいることはけしからん。文都法からいっても京都がこんな汚濁な町でみちみちているように表現するのは、京都を入りにくい街のような印象を与える。そういう意味でも市の意志に反するわけでけしからん。私によい生活環境のもとで育ってきたので差別感を持っていない。それで、部落に対して差別する者の気持ちがわからない……。」

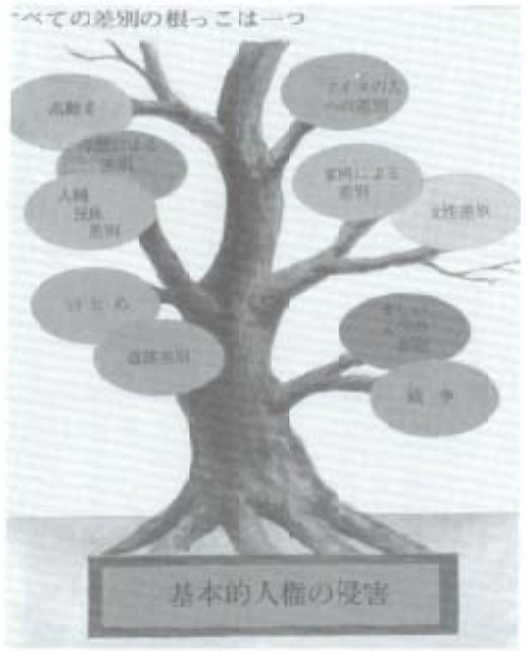
と答えました。

つまり、「杉山個人の問題であり市政はこの問題に関係ない」、そして、「国際観光都市京都の面子をつぶされた」という理解のしかたでしかありませんでした。

これに対し、部落解放京都府委員会は、

「差別は決して観念だけではありません。差別観念は差別実態の反映にすぎないのです。この実態の発展的な解消のために市当局の積極的な対策がたてられない限り、部落にたいする差別がなくなることをだれも保障できないでしょう」

と、小説に書かれたような差別実態を放置してきた市当局の責任を追及していきました。




京都市内の各被差別部落の人びとは、市役所へのデモ行進・町民大会の開催・抗議書や要求書の提出などを次つぎと行い、運動は大きく盛りあがっていきました。

## 本当の差別者はだれか?

このような状況のもと、部落解放京都府委員会は、ふたたび、京都市と話し合いを持ちました。

委員会の要請で、京都市役所の一室に、市長、助役、各局長、課長などが集まっています。会場の正面には、京都市の大地図が張られています。出席した人びとは、「差別小説の話し合いに、どうして地図が必要なのだろう」と、小首をかしげて見つめていました。

話し合いが始まりました。

「市長さん、あなたは今まで『私は差別感を持っていない』『弁護士時代に人権を尊重してきた』といわれましたが、本当の差別者はあなたです。」

予想もしない発言に、市長は、

「えっ!私が差別者ですって!」

と思わず聞き返しました。

「そうです。それを理解していただくために、今日、皆さんにお集りいただいたのです。」

## 差別は市政のなかに!

「今からおたずねすることに当てはまる地域に、一つ一つ丸をつけていただきたい。」

「雨が降ると泥沼のようになる道や、臭いにおいを出す側溝が、ふたもされないまま放置されているところはどこですか」

「結核やトラホームなどの伝染病が多いところはどこですか」

「大水のとき、汚水が井戸に入り込

み、そのあと、疫病・赤痢が集団発生するところはどこですか」
「市内で家庭に水道のほとんどないところはどこですか」
「下水道の通ってないところは……」
「失業者が多く、生活保護帯給率が高いところは……」
「学校にいきたくてもいけない子どもが多いところは……」
「不良住宅が密集している地域は……」

次つぎに質問が出され、地図上に赤い丸印が幾重にも重ねられていきました。

今まで黙っていた消防長が発言しました。

「私のところはあてはまりませんね。私たちは火事があれば、どこでも駆けつけますから。」

「いや、消防長さんに来ていただいたのはそこなんです。なるほど、火事が起これば消防車は駆けつけるでしょうが、道が狭くて消防車が入れない所があるはずです。それはどこですか」

また、丸印が重ねられました。

「幾重にも丸印がつけられたのはどことどこですか。そして、その地域は何と言われている地域ですか」

とどめの問いが発せられました。

会場は一瞬にして静まり返りました。

参加者の目の前には、ほとんどの丸印が同和地区に集中した地図があったのです。

「市長さん。あなたは、差別をしたことがないと言われましたが、差別とは言葉や身振りだけでするものだと思っていたのではないですか。これらの丸印がついた地域の住民も京都市民ですね。市の行政は公平にサービスすべきではないですか。差別は、こうした実態のなかにあり、これを放置しておくことが人びとに差別感を持たせるのです。

これは、行政の責任ですし、市行政の最高責任者であるあなたの責任です。」

市長は深々と頭を下げました。

## オールロマンス闘争から学んだもの

この事件は、行政の在り方と、部落解放運動に大きな影響を与えました。

京都市の行政は大きく変わり始めました。

それまでの行政施策は、祇園、河原町や四条といった裕福な地域に多く行われていました。それが、市民として最も困っているところに目を向け、重点的に施策を行わなければならないという行政の正しい在り方に変わっていったのです。

京都市内の被差別部落では、住宅が建設され、水道設備が整えられ、環境改善が推し進められ、差別を生み出す要因が一つ一つ改良されていきました。

また、このような行政の転換は、今まで放っておかれた被差別部落に行政の手がとどき始めただけでなく、部落と同じよう生活実態にある他の地域にも、行政の暖かい目が届き始めたということも意味します。

被差別部落に水道が引かれるとその周辺の町にも水道が引かれましたし、部落に住宅が建ち始めると、まわりの人びとも同じような生活条件の人びとも要求を出し始めました。

部落解放運動が差別行政を追求していくなかで、行政の在り方を変えていったのです。

そして、この事件をきっかけに、部落解放運動も大きく前進しました。

一九五二（昭和二十七）年、部落解放委員会全国大会でオールロマンス事件、和歌山県西川県議差別発言事件、広島県吉和中学校差別教育事件の教訓から、差別行政反対闘争（行政闘争と略して言うことが多い）に取り組むことを決定しました。

それまでのように差別事件を、単に差別者個人を糾弾したり、謝罪させて終わりにするのではなく、「差別を生み出す要因は、行政や教育の不十分さにある」として、その責任を明確にする闘争を進めていくことになったのです。

これ以後、全国の各地で、隣保館建設闘争、生業資金優遇闘争、住宅要求闘争、教育行政闘争などが取組まれていきます。

やがて、この運動は部落解放国策樹立運動、同和対策審議会答申へと発展し、今日の同和行政へと連なっていくことになったのです。